

ンの実態から乖離した虚像としてのそれを呼称する際は、法令等に見られる史料用語の「切支丹」を用いる。

③ 植木、前掲書、一九三頁。

④ 豊津町史編纂委員会編『豊津町史』上巻、一九九八年、八四九―八五二頁。

⑤ 狭間芳樹「近世日本のキリシタン信仰と救贖思想」『アジア・キリスト教・多元性』第七号、二〇〇九年、二八頁。

(四六版 二五六頁 二〇一四年五月 講談社 税別 一六五〇円)
(東京理科大学講師)

会 告

二〇一四年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一月二日(日)午後一時より京都大学文学部第三講義室にて開催されました。

公開講演は、小島道裕、川島昭夫の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

洛中洛外図屏風をめぐるいくつかの論点

—— 中世から近世へ ——

小島 道裕氏

海の植物園

—— セント・ヘレナ、

モーリシャス、マドラス ——

川島 昭夫氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一四年度会務報告がなされました。

洛中洛外図屏風をめぐるいくつかの論点

——中世から近世へ——

小島 道裕

洛中洛外図屏風は、室町末期から江戸時代にかけての百点以上の作品が現存している。それぞれの内容と制作の背景について、特に発注者ないし享受者の視点から整理を試みた。

室町幕府が描かれた「初期洛中洛外図屏風」は四点が知られる。現存最古の「歴博甲本」は、管領細川高国が足利義晴のために造営した「柳の御所」など高国の事績や関係者が描かれ、その発注と考えられる。次の「東博模本」は、高国関係の事物を抹消し、ライバルであった阿波細川家の細川晴元政権に関わるものが描かれている。

「上杉本」は、將軍足利義輝が上杉謙信に贈るために描かせたとされるが、描かれた幕府（花の御所）はすでに存在しない非現実のものである。

構図の点からこれらの関係を考察すると、左隻（西隻）は諸本によって大きな違いがあり、「歴博甲本」と「東博模本」は細川邸中心の描き方だが、「上杉本」は「花の御所」が中心である。そして描かれた範囲は「上杉本」がずっと広い。これは、相国寺七重の塔から描いた「花の御所」を中央手前に描く絵が祖本としてあり、発注者の意向によって、それを細川邸中心に改変したのが「歴博甲本」と「東博模本」であり、「花の御所」中心という注文に応えるために元の構図をそのまま使ったのが「上杉本」であると考えられる。

初期洛中洛外図屏風の最後になる「歴博乙本」は、「上杉本」の構図を踏襲しているが、政治的な要素は希薄であり、しかし風俗的な面には敏感で、そのような関心から発注されたと理解できる。制作時期も、実際は幕府も細川邸もすでにない織豊期と思われる。

「舟木本」は、初期洛中洛外図屏風（第一定型）を逸脱して、南から見た視点で右隻の方広寺大仏と左隻の二条城を対比させる。全体としては徳川政権肯定の立場で描かれている一方、風俗面に関心が高く、統

治者が嫌う暴力的な場面もあえて描く。二条城近くの後妻打ちは現実の物ではなく、発注者と推測される越前松平家の、庶流である故に將軍家から冷遇された由緒を暗示するのではないか。

二条城を左隻の中央に描く「第二定型」は、徳川將軍の参内や、和子の入内、江戸幕府の政治秩序を描く構図として成立するが、後水尾天皇の寛永行幸以後は同時代性を失い、江戸時代中期には、町人層の嫁入り屏風としても用いられた。江戸の工房でも制作されたことが指摘されており、実態を離れた「雛飾り」的な絵になっていく。

洛中洛外図屏風からは、その背景となった社会の実態の変化も個別図像の中に見えていくことができる。多少の例を挙げれば、中世段階の洛中洛外図屏風に見られる若い女性や幼児を連れた尼は、一家を率いる後家尼の姿と見なせるが、近世になると見られなくなり、女性の地位の変化を示している。「歴博甲本」で床屋が描かれ、いずれも角地にあるのは、月代をあげる髪型の普及と、両側町が成立し共同体成員の理髪需要が生じたことが背景だろう。床屋は「舟木本」では橋のたもとという共同体を離れ

た場所に描かれ、本来仏具であった剃刀も用いられるようになる。

都市の近世化と共に、店舗の看板も多く見られるようになる。「うどん屋」の看板が多く見られるのは、巨大化する近世都市への人口の流入と外食産業の波立が背景と考えられ、うどん屋の主人がしばしば暴力的な人物として描かれているのは、新奇な店への眼差しであると共に、暴力的なものを好む時代の風潮を体現しているのだろう。象徴的に言えば、近世初期は、「都市に暴力とうどん屋がはやる時代」だったとも言えよう。

海の植物園

——セント・ヘレナ、モーリシヤス、マダラス——

川 島 昭 夫

ヨーロッパの植物園は、一六世紀中頃にイタリア半島の大学都市において、医学の研究・教育用施設として設置されたものを嚆矢とする。その後一七・一八世紀にかけて、イタリア以外の大学にも植物園が誕生し、また都市や医師・薬剤師の職業団体に

所属する植物園や、王室の所有する植物園も出現した。これら初期の植物園・薬草園は、およそ五エーカーを標準的な規模としたようである。オクスフォード大学の植物園、リンネのいたウプサラ大学植物園、ロンドンの薬剤師組合のチェルシー薬園などが該当する。主としてヨーロッパに自生し、薬用効果を有する植物を中心とする植物を収容するにあたって、この規模が適正であったということだろう。

現在世界有数の植物園の地位を確立したロンドンのキュー植物園も、王室庭園の一部が一七五九年に最初に植物園としてレイアウトされた時、九エーカーがそれにあてられたにすぎない。一方、四半世紀後、カルカッタにイギリス東インド会社を設置した植物園は、六〇〇エーカーの広大であった。他方、ほぼ時期を同じくして、同じくインドのマダラスに東インド会社を設置したサポテン園 (Copaty) は、わずか二エーカーに過ぎない。ヨーロッパの植物園と、ヨーロッパ諸国が植民地各地に設置した植物園とは、同じ名称を使用しているも、類型において異なったものとみなさねばならない。

一般に、最初の植民地植物園とされるのは、フランスがインド洋のモーリシヤス島、バンブルムースに設立したものである。フランスがこの島を領有した直後の一七三五年に、総督ド・ラブルトネが、自身の所領モン・ブレイジュールに「菜園」を置いたのがその起源である。野菜は、港ポール・ルイに寄港するフランス東インド会社船に供給された。さらに総督は、同島で開始されたプランテーション経営で使用される奴隷の食料として、カツサヴァ芋をアフリカ大陸から導入し、その試験的栽培施設として「菜園」を利用した。その後、一七七〇年代初には、同島の行政官ボワヴルによる、香料諸島からの香料植物の、フランス植民地への移植のための基地として同地は使用され、ボワヴルが同島を離れた後、一七七五年に王立植物園となった。

ド・ラブルトネやボワヴルの事業や、そこにおいてはたした植民地植物園のはたらかきは、イギリスにおいてもよく知られ、ナポレオン戦争時にイギリスがモーリシヤス島を領有した時、植物園も接収され、イギリス帝国の植民地植物園ネットワークに組み込まれることになった。

植民地植物園が巨大化した理由はいくつか考えることができる。①熱帯・亜熱帯地域の植生のゆたかさ。②植物の有用性が、薬種から食用・原料用などいちじるしく拡大したこと。③各国における庭園建設熱の流行によって経済植物でない観賞用植物への関心の拡大。④以上のすべてにおいて国家間の競争がつよく意識されたこと。⑤競争とは逆に、科学としての植物学の普及によって、植物学者間の協力、協働が見られたこと。こうした理由の多くが複合することによって、植民地植物園は大規模化し（あるいは機能に特化し）、特有の性格を獲得することになった。その意味で、上記のバンブルムース植物園は典型といえるが、他の植民地植物園にもその性格は共通する。多くの植民地植物園が種苗の育成を重要な機能とした。植民地において入植活動が行われる場合、初発において開拓を行う入植者に種苗を提供するための公的な施設が必要となる。一七三〇年代に行われたイギリスによる北米ジョージア植民では最初の入植地サヴァンナに public garden と呼ばれる農業施設が設置され、ヨーロッパから輸送された植物の種苗が育成されたほか、

可能性のある植物を採集する目的で中米地域に植物学者が派遣された。public garden は、その後、養蚕を奨励するための桑の木栽培が行われた後、廃止された。一八世紀末に行われたオーストラリアのニュー・サウス・ウェールズ入植では、総督アーサー・フィリップが、途中ブラジルやケープ植民地で収集した経済植物を総督邸の庭園で試験栽培し、また食用の作物の種苗を育成するために、government farm を設置した。この位置に一九世紀に入ってシドニー植物園が作られる。一八四〇年代にフランスから多くの種類のブドウが導入され、オーストラリアの気候に適する種の選別試験が行われたのは、シドニー植物園内においてであった。

種苗育成のための植物園という性格が最も端的に表れたのが、インドに染料の原料となるコチニール・カイガラムシが着生するウチワサビテを導入するためのマドラスの Nooitje であり、またカルカタ、マドラスとはほぼ時期を同じくして、大西洋の東インド会社船の寄港地であったセント・ヘレナ島の植物園も、中米・南米からのカイガラムシの生体の中継地として、マドラ

スからウチワサビテンが移植された。こうした「海の植物園」は、帝国領土内での植物の交換と増殖を目的とするネットワーク・システムとして考える必要がある。

二〇一四年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇一四年度大会・総会は、一月二日（日）一三時から一七時半まで、京都大学文学部第三講義室において開催された。

総会では、永井和理理事長による挨拶の後、飯塚一幸氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（久保一之常務理事）からは、役員交代、その他について報告があり、来年度の例会は四月十八日（土曜日）に「家族」をテーマとして開催することが案内された。

編集（吉川真司常務理事）からは、『史林』の刊行について報告があった。

会計（上島亨常務理事）からは、二〇一三年度予算の紹介、その他の報告があった。広報（永原陽子常務理事）からは、広報